

箱封印 アナルボックス



+魔力抽出アナルビーズ



「さてと… 箱の状態は安定したかしら…?」

薄暗い部屋でひとり呟く魔法使いの女。

視線の先には石造りの棚 そこに並ぶ7つの小箱。

赤・青・緑… カラフルな装飾が施された正方形の箱を順番に眺めながら

女は満足そうな笑みを浮かべる。

「うふふ… やっぱり見た目も華やかで可愛くなくちゃね」

「中身はどんな具合に仕上がったかしら…?」

あなたたちの恥ずかしいところ 見せて貰うわね♡」

女は嬉しそうに小箱の蓋を開けていく。





「あらあら どの子もかわいいわね♡」

箱の中にあったのは「肛門」そのもの。

形や大きさの個性があり 本物そっくりの生々しい作り込みだ。

さらには触れると人肌の温かみがあり よく見ればヒクヒクと小刻みに収縮している。

…そう これは作り物ではない。

【アナルボックス】

それは特殊な呪術によって小箱に封印された妖精の少女たちの成れの果て。

意識や自我はそのままに身体的自由の一切を奪われ

かろうじて外の世界に露出させられた肛門の感覚のみが

もはや彼女たちが知覚できるすべてだった。

声すら上げられず… 何にも触れられず…

無音の暗闇の中で幼い妖精の少女たちが

どれ程の怯えと恐怖と絶望に苛まれているのか… 知る由もない。



「でもカワイイだけじゃダメよ？ちゃんと役に立って頂戴ね」

手にした鞆から取り出したリング状のアイテム

女はそれを目の前の箱に収まった肛門につぶつぶと挿入していく。

「アナルビーズリング」

それは妖精のもつ高濃度の魔力を効率的に取り出す魔道具。

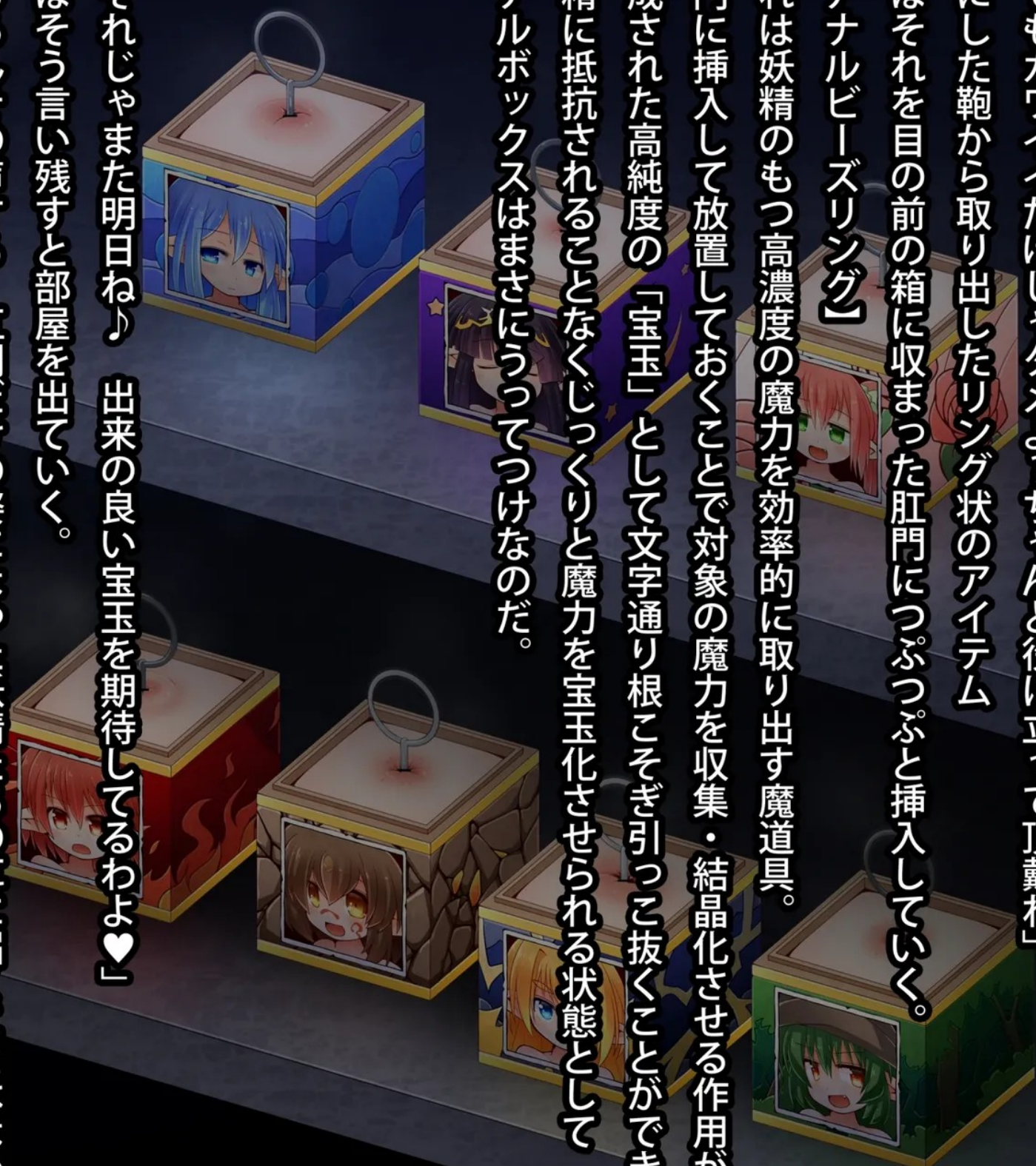
肛門に挿入して放置しておくことで対象の魔力を収集・結晶化させる作用があり形成された高純度の「宝玉」として文字通り根こそぎ引っこ抜くことができる。

妖精に抵抗されることなくじっくりと魔力を宝玉化させられる状態としてアナルボックスはまさにうってつけなのだ。

「それじゃまた明日ね♪ 出来の良い宝玉を期待してるわよ♥」

女はそう言い残すと部屋を出ていく。

もちろんその声すら 肛門だけの姿になった妖精たちの耳に届くことはない…







女が慌てた様子で扉を開ける。

「遅くなっちゃったわ〜 ごめんね〜」

あれから約28時間が経過していた

肛門に挿入されたリングがカラフルに変色している。

「うんうん いい感じになったみたいね♥」

性格や体つきと同じように 宝玉化した魔力の形状にも個性がある。

大きさ・色合い・重さ・造形・透明度：まさに千差万別であり

それによって適切な用途が変わってくる。

女は魔法の研究の傍ら 妖精から抽出した宝玉の販売を稼業としていた。



「さ〜てさて… それじゃお楽しみタイムよ♥」

女は箱を手に取りテーブルに並べていく。



最初に選ばれたのは赤い箱

女がうきうきした様子で捲し立てる。

「うふふ… 火属性らしいわんぱくで活きの良い子だったわね♡」
肛門の襞が微かにヒクつき 透明な汁が溢れている。



「アナルの色は薄めで控えめなぷっくり… かわいいわよ♡
あなたの魔力はどんなカタチかしら？」
リングに指を通し ゆっくりと引き抜いていく…



にゅぷっ にゅぽんっ にゅぽんっ

引き抜かれたのはルビーのような紅い宝玉
大きさは不揃いだが整った球状をしていて
中心部は炎が灯るように明るく黄色に光っている



「あらあら 綺麗な色ね♪

でもはじめてなのにこの大きさはちよつと大変かしら？

ゆっくり引っ張ってあげましょうね♡」



「はーい おつかれさま♥

がんばったわね♪」

引き抜かれた宝玉から滴り落ちた汁が

だらしなく拡がりきった肛門に垂れ落ちていく。



「この大きさなら観賞用にも高く売れそうだけど…」

火の宝玉は使い勝手が良いし 自分の魔法の研究用に使いましょ♪」



次の箱に選ばれたのは…

「この子は…大地の妖精だったわね♪

疑うことを知らない素直で私好みの子だったわ♪♡」

きゅっと縮こまったような年相応の幼さを感じる狭く小さな肛門は恐怖と不安に小刻みに震えているようにもみえる。



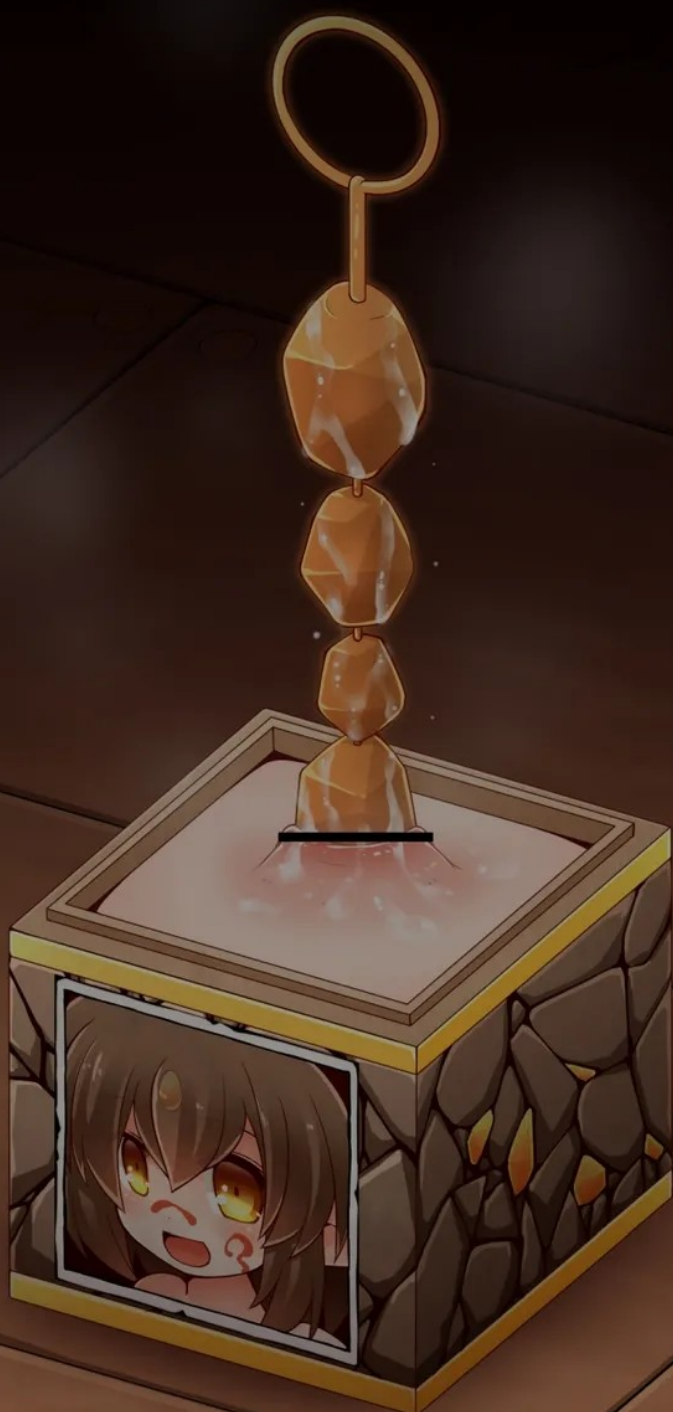
「世の中には私みたいなわるゝい人もいっぱいいるんだから
気をつけなきゃダメよ？ もう遅いけど…♡」



ちゅぷっ　ちゅぷっ　こぼっ　くぷっ…

色も形も道端の小石のような宝玉

大きさもさっきの火の妖精ともの比べて一回り小さめのようだ。



「んゝ　土属性の子はだいたいこんな感じよねゝ

それにしても小粒な感じがしら？

まだまだちっちゃかったし仕方ないわね♡」



「あら 小さいけど数は意外と多かったわね♥
将来有望だったのかしら♪ 偉いわよ♪」

ようやく先端まで宝玉を引き抜かれ終わった未成熟な肛門は
閉じたり拡がったりして小刻みな伸縮を繰り返している。
まるで激しい運動の後に呼吸を整えているかのように。



「んっ ちょっと輝きが足りなくて
観賞用や装飾用には使えないわねっ
土魔法を使うことがあったら触媒にしようかしら」



次の箱に封じられているのは雷属性の妖精 箱の装飾もまさにそのものだ。

「この子には期待できるわね♪

まだ子供なのにあんなに強力な雷撃を放てるなんて…

捕まえるのに苦労したわ〜♥」



挿入されたリングをなんとか排出しようとしているのか
力んでは緩みを繰り返しているように見える。

「あらあら いやらしい縦割れアナルね♥

そんなに力まなくても 今抜いてあげるわよ〜♥」



めりっ ずぶぶぶっ ぎちっ ぎちっ にゆぶぶっ…

「あらあ… すっごおい♡」

引き抜かれたのは明るく黄色く発光し

丸い珠に突起がいくつも突き出した歪な形の宝玉。



「んゝ 期待通りの大きさと輝きねゝ♪

それにこのカタチ… エッチなオモチャでもなかなか無いわよ♡

自分の魔力がこんな刺激的なカタチだなんて知らなかったでしょうね♡

ほらほら がんばれ♡がんばれっ♡」



「んふふ… 大変だったわね〜♪

この子 いまどんな顔してるのかしら♡」

ようやく全ての宝玉を引き抜かれたあとの肛門は
突起によって褌が内側から引っ張り出されて捲り返り
充血して腫れ上がった惨たらしい有様を晒している。



「んん〜 これは売ってよし使ってよしの逸品ね〜
まずはマーケットで高値でふっかけてみましょ♡
苦勞した甲斐があったわ〜♡」





「この子は…東の大森林で捕まえた子♥
人間を森で迷わせて遊んでたイタズラっ子ちゃんね♥」
魔術師ギルドから妖精の捕獲依頼を受けて森に出向いた
あの日のことを思い出す。



「私に捕まってからずっと生意気な態度だったけど…
これから自分がどうなるのか教えてあげたら
みるみるうちに泣きそうな顔になっちゃって…♥」
恍惚の表情でため息をつく。

「あなたみたいな妖精らしい妖精の子も大好きよ♥
でも ちょっとおいたが過ぎちゃったわね〜♪」



ぐぷっ… もこもこっ… にゅぽっ にゅぽんっ

「あらあら！この子もいい魔力持ってるじゃない♡」

彼女の宝玉は胡桃のようなボコボコした球状で深緑色。

ひとつひとつの大きさも雷の妖精のそれより大きめだった。

「これだけの魔力と素質があったら
人間を森で迷わせるどころか
もっと大胆な悪戯もできたんじゃないかしら？

んゝ 勿体なかったわねえ♡」

悪戯のお仕置きと言わんばかりに
じっくりゆっくりと焦らすように
時間をかけて宝玉を引き抜いていく。





「はーい ぽっかりアナルのできあがり♡」
最後のひとつの宝玉が引き抜かれると
もわあ…っと芳しい香りを纏った生暖かい湯気が立ち上る。



「この宝玉は是非私の研究に有効活用したいわね
売っちゃうなんて勿体ないわ♡
うふふ 文字通りの掘り出しモノだったわ♡」
女はご機嫌な表情で次の箱を選ぶ。



「この子は… マーケットで買い取った水の妖精ね
無口だけど綺麗な髪でカワイイ子だったわね♪」
あらゆる商品が取引されるマーケットでは
稀に妖精が売りに出されることもある。



「まだ誰にも汚されていない無垢な身体の天然モノって話だったけど…」
妖精の体内に蓄えられる魔力は
育った地域や置かれた環境に大きく品質が左右される。
女は期待してリングに指をかけた。



ぷちゅっ きゅぷっ きゅぷぷっ…

「あら…あらあら！素敵！」

雨粒のような形と透き通った青色で
いかにも水の妖精らしい美しい宝玉。

さらに大きさも申し分無い。



「期待通り…♡ やっぱり私は妖精を見る目があるわ♡」

自画自賛しながら

宝玉と肛門の両方を傷つけないよう慎重に引き抜いていく。



「あらあら…♡ あんなにおしとやかで
なんにも知らなそうな顔してたのに…
イヤらしいアナルになっちゃったわね…♡」

特に丁寧に引き抜いたつもりだったが
宝玉のサイズが大きかったのもあって肛門はすっかり緩み広がって
しばらくはこのまま元に戻らなそうだ。



「これは宝飾ギルドに高く売れるわね♪」

ネックレスかイヤリングにしたらきつとステキよ♡」

肛門のみっともない有様と宝玉の美しさの対比に満足しつつ…
女はさらに次の箱を選ぶ。



「この子は… 結局目を覚ましてくれなかったわねえ…」
それはとある魔導書に記された召喚の術式。
解読できたのは古代の妖精を喚び出すもの
…らしいという断片的な情報のみ

「夜とか：闇とか 月の妖精とか：

いまいち今の私達の言葉に訳しきれない表現なんだけど
妖精って言われると好奇心に勝てなかったのよねえ」

召喚には成功したものの その姿は他の妖精と比べても特に小柄で幼く
何より妖精はずっと眠ったままで
どうやっても目覚めさせることができなかった。





ちゅぷっ　ちゅぽっ　にゆるるっ　にゅぽっ

謎だらけの妖精の宝玉の形は

大地の妖精に似た不揃いな小石のようで…

しかしひとつひとつがとても小さく



「あらあら…　こんなのはじめて見るわねえ…♡」

暗い紫色の宝玉の中に小さな光の粒のようなものが散りばめられキラキラと光っている。



「すごいわ！これは私の秘蔵コレクション入りね♡」

根本は暗い紫色で 先端にいくほど明るくなるグラデーション
そしていくつもの細かな粒が白く輝く

まさに夜の星空のような美しい宝玉だった。



「たまにこういうことがあるから宝玉集めはやめられないわ♡♡」
満足した様子で女は最後の箱に手を伸ばす。



「さて 最後は…♥ 待たせちゃってごめんなさいね♥
でも貴方は特別なもの♥」

最後の箱に封印されているのは花の妖精。

女が研究の助手として調教・使役していたが
なんと彼女は自ら望んでこの姿になったのだ。

彼女はアナルボックスの存在を知るや 是非自分もそうになりたい
肛門だけの姿になり宝玉を引き抜かれないと懇願したのだ。

「まさかそんなことまで言い出すなんて…」

まあ そんなエッチな子に育てたのは私なんだけど…♥
ぷっくりと膨らんだ肛門が今か今かと待ち侘びるように
ヒクヒクと汁を垂らしながら収縮を繰り返している。





きゅぽぽっ きゅぽぽぽっ にゅぷぷぷう…っ

その宝玉は鮮やかなピンク色をしたいくつもの括れのある楕円形。

「んもう…♡ なんてイヤらしい形かしら

そんなに気持ちよくなりたいのね♡

いいわよ… 存分に味わいなさいね♡」

宝玉の細い部分と膨らんだ部分…

その段差を堪能させるように たっぷりと時間をかけて宝玉を引き抜いていく。

時折抜く力を緩めてやると

引き抜いた部分を再び飲み込もうとするように肉壁が蠢く。

「あらあら…♡ しょうがない子ね…♡」



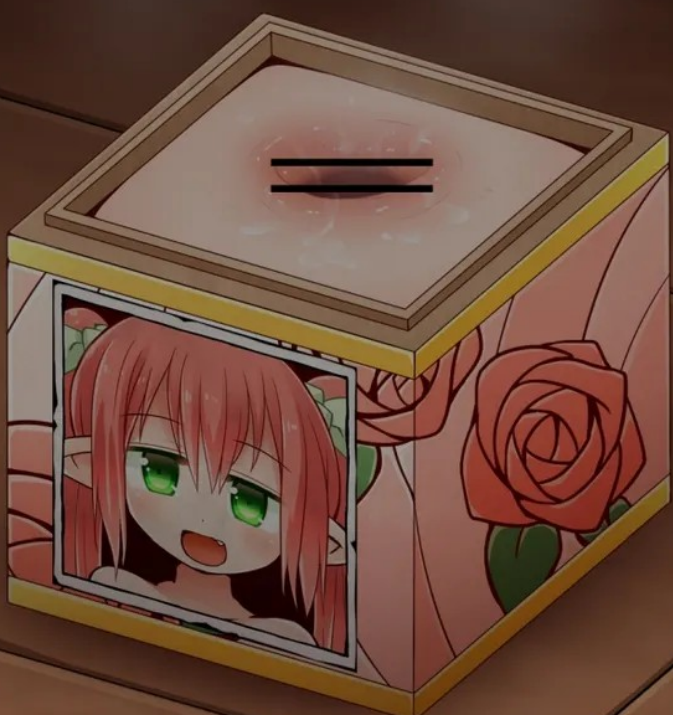


「満足してくれたかしら…?♡」

ようやく先端まで引き抜かれた宝玉は

根本のピンクから先端にかけて徐々に黄色く色が変わっていた。

若い花びらのように鮮やかな色合。



肛門はすっかり力が抜けたように弛がりきって

汁にまみれながら満足気に脱力しているように見えた。



7つのアナルボックス棚に戻し

女はひと仕事終えた充実感の中で微笑んだ

「うふふ みんなおつかれさま…♡」

「どの子もステキな宝玉だったわよ♡」

肛門だけを無防備に曝け出す無様で下品で無力な箱の姿にされ…

さらに魔力は根こそぎビーズの形で引き抜かれ

その後もぽっかりと開ききった肛門を閉じることにも隠すこともできず

棚に並べて陳列される…

妖精たちの声は誰にも届かない

それどころか表情も感情もどこからも読み取ることは出来ない。

「それじゃ 今日のところはゆっくり休んで頂戴ね♡」

返事など帰ってこないことを知りながら

女はそう言い残し 部屋を後にした。